Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

演習授業における音楽創作の試みと事例研究

―電子楽器クラビノーヴァを用いて―

宮脇 長谷子
(静岡県立大学短期大学部)

1 はじめに

保育者養成におけるピアノ指導の望ましい指導のあり方を継続的に研究・実践する中で、筆者は常に創作教育の重要性を感じてきた。なぜならば、子どもの創造的な活動を引き出すためには、高度なピアノ演奏技術よりも即興性や創造性が保育者に求められると考えるからである。身体的な活動において、その動きに合わせた音作りを可能ならしめる能力の育成を念頭においたピアノ指導と、そのための教材作りや構造的なカリキュラムの検討・作成をライフワークとしてきたのである。

しかし、従来のピアノ指導の形態(一人あたり15分程度の個人レッスン)では、時間的な障害のみならず、ピアノ演奏の特性からも無理があり、創作教育は、ML導入校で先行して行われてきた。筆者の勤務校でも、ヤマハのクラビノーヴァ10台を購入し、その中でMIDI録音機能を備えた5台を用いて平成9年より創作指導を行ってきた。台数も少なく、演習授業(ゼミ)のため受講生も少人数ではあるが、同じカリキュラムで授業を行った平成11年からの3年分をここにまとめ、分析を試みたい。

2 研究の目的・仮説

学生が即興的に演奏し録音した作品を楽譜化し、分析することによって評価のポイントを探るとともに、より効果的な創作指導の方法と今後の課題を探る。あわせて学生の創造性とピアノ学習との相関を調べ、ピアノの学習歴、習熟度と創作能力は比例しないことを仮説としたい。

3 研究の方法

3-1) 対象

勤務校の社会福祉学科の学生19人。1年次後期から2年次の前期に開講される社会福祉演習で筆者の授業を選択した学生のうちクラビノーヴァを用いた者であり、保育士選択学生は8名、他は介護福祉士を目指す学生達である。テーマは「自分の音を作ろう」というものであるが、授業開始時にはピアノを全く弾けなかった学生も3名含まれている。表1における演奏上級者とは入学前に5年から10年間ピアノを習ったことがあり、目安としてソナタ以上が弾ける者、中級者は5年未満でソナチネ程度、初級者は1年未満の者である。

3-2) カリキュラム・授業内容

(1)ガイダンス。クラビノーヴァの機能説明・演習、音色選択、リズム選択、学習機能等。

(2)多重録音の説明と練習、共通課題「ドイツ民謡」。1トラック(ピアノ・伴奏・リズム)、2トラック(クワイア・伴奏・和音)、3トラック(バイブ・主旋律)。ここで初めてピアノを弾く経験をする者については工夫をして(重音をさらに分ける等)トラック数を増やすことを許可している。

(3)コードネームの説明・コードを押さえる練習。コードネームの理論的説明は基本的なもののみに止め、ピアノ演奏初心者については、クラビノーヴァの「シングルフィンガー」機能を利用し、コードの根音のみを押さえる練習をさせる。

(4)自動伴奏の説明、共通課題「里の秋」、「小さな世界」。スプリットの設定、イントロ・エンディングの練習、「シングルフィンガー」、「フィンガーコード」等を使って自動伴奏の練習、指定リズムはポップスバラードとトラディショナルマーチ。ここでも、初心者はまず「シングルフィンガー」で自動伴奏を録音してから、それに合わせてメロディーを練習し、多重録音をさせる。上級者はメロディーと左手のコード押さえ(自動伴奏)を同時に行い録音する。

(5)メロディーの変奏、オブリガード、重音の説明。経過音、倚音、反進行、協和音等について簡単に説明し、筆者の作品(「星に願いを」)を録音してみせる。ここでの説明はあまりヒントを与えすぎないように留意する。

(6)共通課題「星に願いを」の編曲、録音。同曲のシンプルな楽譜(石井由希子編曲、ヤマハミュージックメディア出版)をもとに自分なりに工夫して創り変えた曲を録音し、そのフロッピーを提出させる。音色の選択、多重録音、自動伴奏の利用、リズムの選択などすべて自由とした。

(7)自由課題 1～2曲。介護福祉専攻生には老人介護の現場における音楽療法に役立つ曲をイメージさせ、保育士選択の学生には子供の身体表現に合った曲をイメージさせて自由に曲を選択し、編曲し録音させる。

(8)共通課題・メロディー創作。ある曲のコード進行による自動伴奏を入れておいたフロッピーを渡し、メロディーを創って録音させる。

3-3) 分析の方法

以上のカリキュラムの中で今回は特に(6)の共通課題のみをとり上げ分析することにした。提出されたフロッピーをコンピューターソフト・シンガーソングライターにかけ楽

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

譜化し、そこに見られる演奏者の創意工夫を点数化し、その合計点と耳で聴いた時の評価とを比較してみる。

〈評価のポイント〉

(1)トラック数

使用している録音トラック数が多ければそれだけメロディー以外の音を多く使って工夫しているということであるからそのまま数をカウントする。音色数によるカウントも考えたが、多重録音の工夫を評価し、今回はトラック数とした。ただし自動伴奏はそれだけで5〜8トラックとってしまうので全て1としてカウントする。

(2)メロディー変奏。あり(1点)、なし(0点)(譜例1, 2)

(3)重音の使用。あり(1点)、なし(0点)(譜例3)。

(4)対旋律的な工夫。あり(1点)、なし(0点)(譜例4)

(5)伴奏部分の工夫。あり(1点)、なし(0点)。

以上、(2)から(5)について 1、0 評価としたのは内容の良し悪しの評価には主観が入るため、それを避けたかったからである。

4 結果と考察

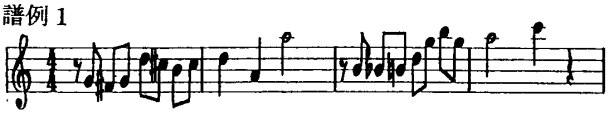
分析の結果を個人別にまとめたのが表1である。本来、創作作品を客観的に評価するのは難しく、点数化することの無謀さを自覚しつつも、耳で聴いたときの主観的な評価と数字が一致した結果となり納得している。もちろん、点数が低いというだけで「だめ」な作品というわけではない。例えば、譜例2のようにメロディーを変奏しているAは、いきなり下降するグリッサンドから始まって、アップテンポの自動伴奏にのり一気に弾き切って爽快感がある。「星に願いを」という曲のイメージからはかけ離れている分だけオリジナリティは十分にあると言えよう。ただ、自動伴奏に頼りすぎていて、右手・主旋律しか印象に残らないという欠点が残る(5点)。

逆に譜例4のように対旋律を考えたSは、自動伴奏を利用せず丁寧に多重録音をしてリコーダのアンサンブルの様な味わい深い雰囲気を醸し出している。Aよりも多くトラックを使っているのが意外であったが、総合でも12点と大きく上回ることとなった。Sと同じく全くピアノが弾けないQは、譜例3を 2 トラック使い、チャペル・クワイアで綺麗にハモらせており、自動伴奏 Jazz Ballad1 との絡み合いも自然である。以上は耳で聴いていて「良い」と評価出来るものであるが、さすがに 3 点、2 点になると与えられた楽譜をそのままパートに分けて弾いて自動伴奏をつけただけのものであったり、旋律に四声体和声の課題のような伴奏をつけたものであった。そういった作品はⅡ群の学生に多く、Ⅰ群の平均が 6 点、Ⅱ群が 3.7 点、Ⅲ群が 8 点という結果から、ピアノの演奏能力と創作能力は比例しないことがある程度立証されたのではないか。

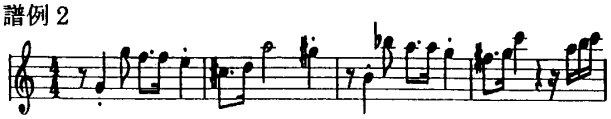
表1ピアノの習熟度と評価　　( )内は自動演奏の有無

学生		評価のポイント					
		トラック数	メロディー変奏	対旋律	重音	伴奏の工夫	合計
Ⅰ演奏上級者	A	3(○)	1	0	1	0	5
	B	3(×)	1	1	0	1	6
	C	5(×)	0	0	0	0	5
	D	7(×)	0	1	0	0	8
	E	4(×)	0	0	0	0	4
	F	5(×)	1	0	0	1	7
	G	6(×)	1	1	0	0	8
	H	4(○)	0	0	0	1	5
Ⅱ中級者	I	3(×)	0	1	1	0	5
	J	4(×)	0	1	0	0	5
	K	2(○)	1	0	0	0	3
	L	2(○)	1	0	0	0	3
	M	3(×)	0	0	0	1	4
	N	1(×)	1	0	0	0	2
Ⅲ初心者	O	3(○)	1	1	0	1	6
	P	3(○)	0	0	0	1	4
	Q	9(○)	0	1	1	1	12
	R	5(×)	0	0	0	1	6
	S	9(×)	1	1	0	1	12

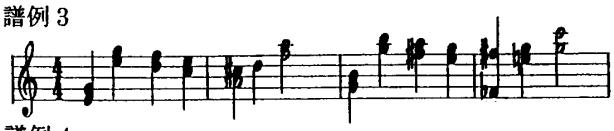
譜例 1



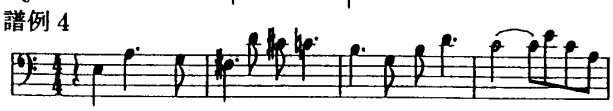
譜例 2



譜例 3



譜例 4



5 まとめ

以上3年間の授業実践の分析を試みてきたが、学生が「楽しみながら取り組めた」と大学で行ったアンケートに答えている点には安堵している。今後の課題としてはカリキュラムの(8)コード上でメロディーを創る、というレベルに全員が到達できるようにさらに工夫を重ねるとともに ピアノ指導への応用と電子楽器の有効な活用についても考えていきたい。

謝辞　カリキュラムの作成(2)(4)に当たっては、作曲家小山恭弘氏に、コンピューターの処理については、勤務校の学生太田一臣さんにお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

NII-Electronic Library Service